夏　焼　遺　跡

中山間総合整備事業御柱の里
東裏地区に伴う発掘調査報告書

２００３

長野県富士見町教育委員会

例　言

1　本書は平成14年度県営中山間総合整備事業御柱の里東裏地区に伴う夏焼遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査、試掘調査および整理作業は、国および県からの補助金を受け、以下の日程で行った。

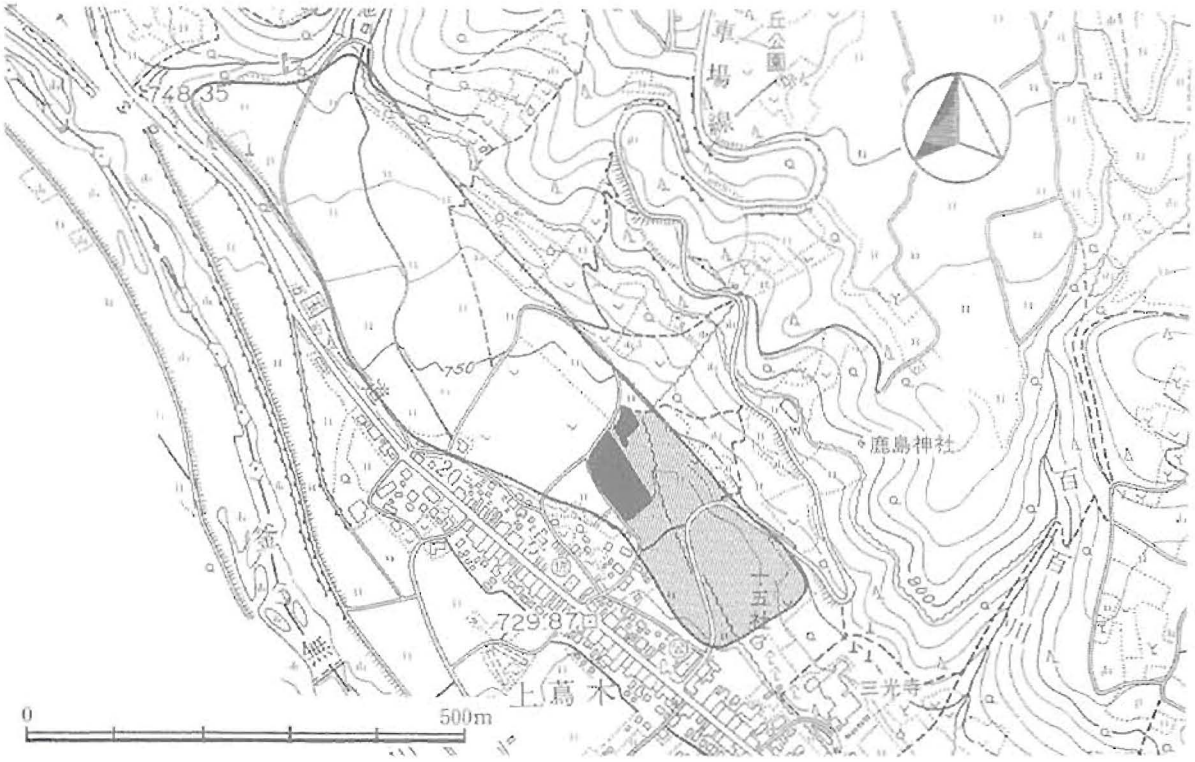
発　掘　調　査	2002年７月12日～12月20日
図面・遺物整理作業	2002年11月22日～2003年３月20日

3　試掘および発掘調査は樋口誠司・小松隆史が担当した。また本書の執筆、編集および遺物図面の製図は小松隆史が、遺構図面の製図は吉岡博子が行った。

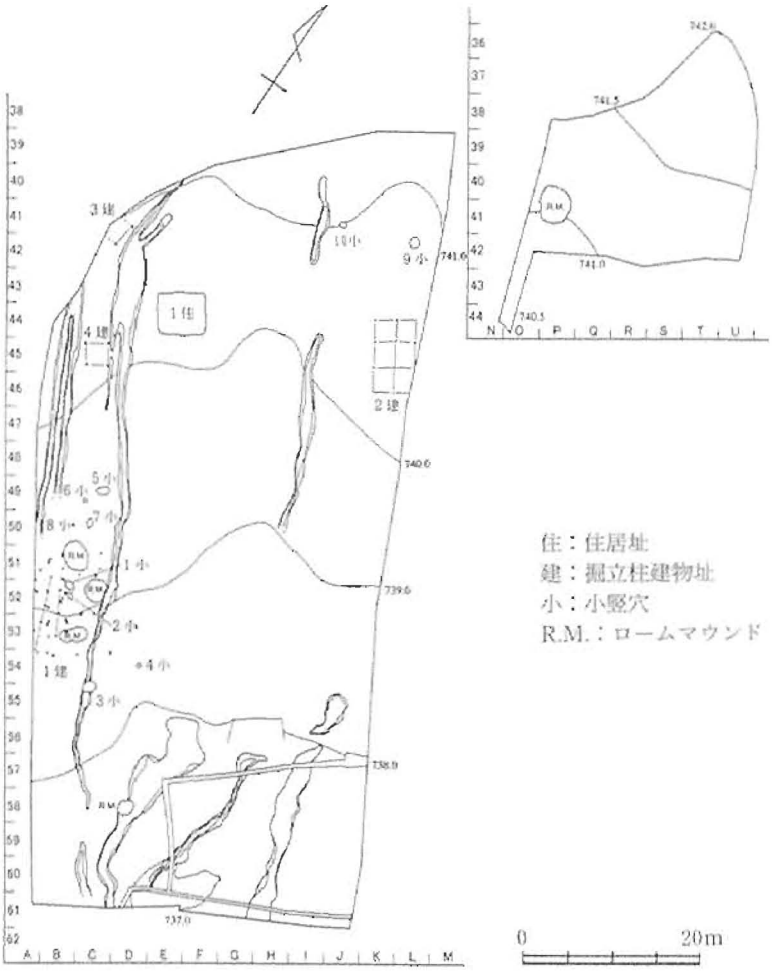
4　本報告にかかわる出土品、諸記録は井戸尻考古館に保管されている。

発掘調査・整理作業参加者名簿

調査担当	樋口　誠司	小松　隆史				
発掘作業	伊藤　史裕	今井ときわ	今井　勝	小口　明子	小池　敦子	
	小平　辰夫	小林ノリ子	小林　甫	小林　道子	田中　基	
	平出　慶喜	武藤きのゑ	吉岡　賢	吉岡　博子	吉川　益子	
整理作業	伊藤　史裕	吉岡　博子				



第1図　夏焼遺跡 位置と事業対象範囲 (1/10,000)



第2図　調査区全体図 (1/1,000)

1　遺跡の環境と調査の経緯

夏焼(なつやけ)遺跡は甲信境に近い上蔦木集落の北、釜無川に向かって切掛川により形成された扇状地に位置する。現在遺跡の大半は水田や畑になっているが、水田の石積みや割り畑の様子は風情があり、近年急速に失われつつある貴重な景観を残している。

また、ここから三光寺をはさんで南東およそ500mに、縄文時代前期の大集落と平安時代の集落である坂平(さかだいら)遺跡があり、1996年に緊急発掘調査されている。

夏焼遺跡は表面採集によって得られた遺物や伝承から、①坂平遺跡と同じ縄文時代前期の集落　②縄文時代中期～後期の集落　③平安時代の集落　④蔦木宿として甲州街道沿いに展開する以前の、中世の蔦木村の跡　という４つの生活層の存在が推測された。

遺跡は北西―南東で900m、北東―南西で最大230mほどの範囲に広がると推測され、このうち南東側約４万㎡が中山間総合整備事業の対象地となった。前述のように複数の面を調査する必要が予測されたため、協議により、まず試掘調査を行って対象面積を絞り込んでから発掘調査を行うことになった。この試掘調査の結果、東側のほとんどが埋没沢で遺構・遺物が全く存在していないことがわかり、本調査の範囲をかなり絞ることができた。

2　遺構と遺物

小　竪　穴

1号　ローム粒、炭混じり黒色の堆土で、浅い盤状の穴。壁と底には地山礫が露出している。

2号　暗褐色の堆土で硬く締まっている。浅い皿状の穴で、地山礫が露出し、凹凸が激しい。

3号　黒褐色の堆土で、小判形、盤状の穴。底、壁は地山礫が多く露出し、凹凸激しい。堆土中より縄文晩期と思われる土器片が数点出土しており、穴の形状からみてもこの時期の墓穴である可能性が高い。一部を後世の汐状遺構に切られている。

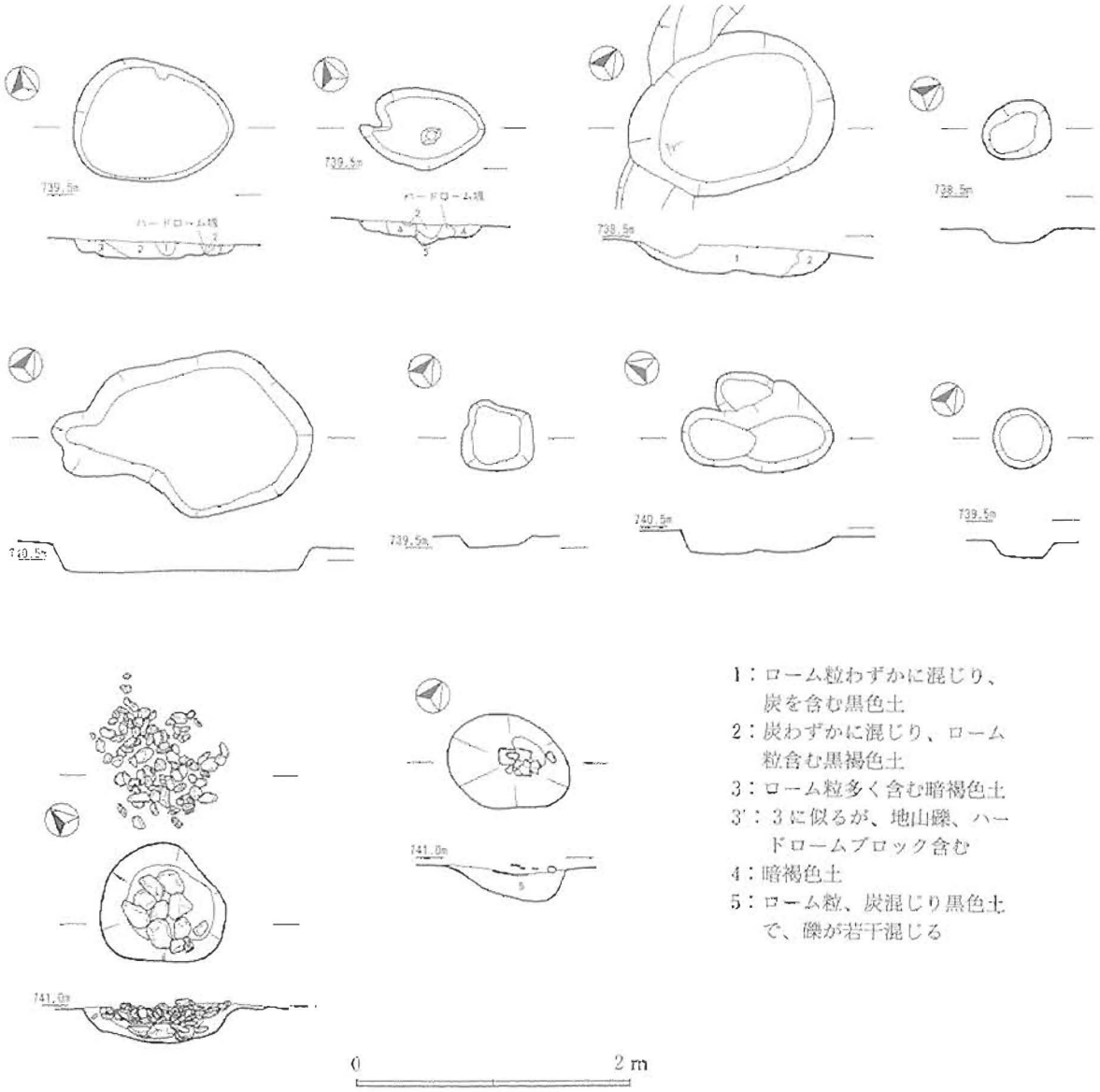
4号　黒色の炭混じり堆土。底、壁には地山礫が露出している。

5号　盤状の穴。底は平らだが、地山礫が露出している。

6号　浅い穴。底は平らで、硬砂岩製の石鏃片が出土している。

7号　複数の小竪穴が重複しているようだ。底には地山礫が露出している。

8号　円形で洗面器のような穴。



第3図　小　竪　穴（1/60）

上段左から1、2、3、4号　　中段左から5、6、7、8号　　下段左から9、10号

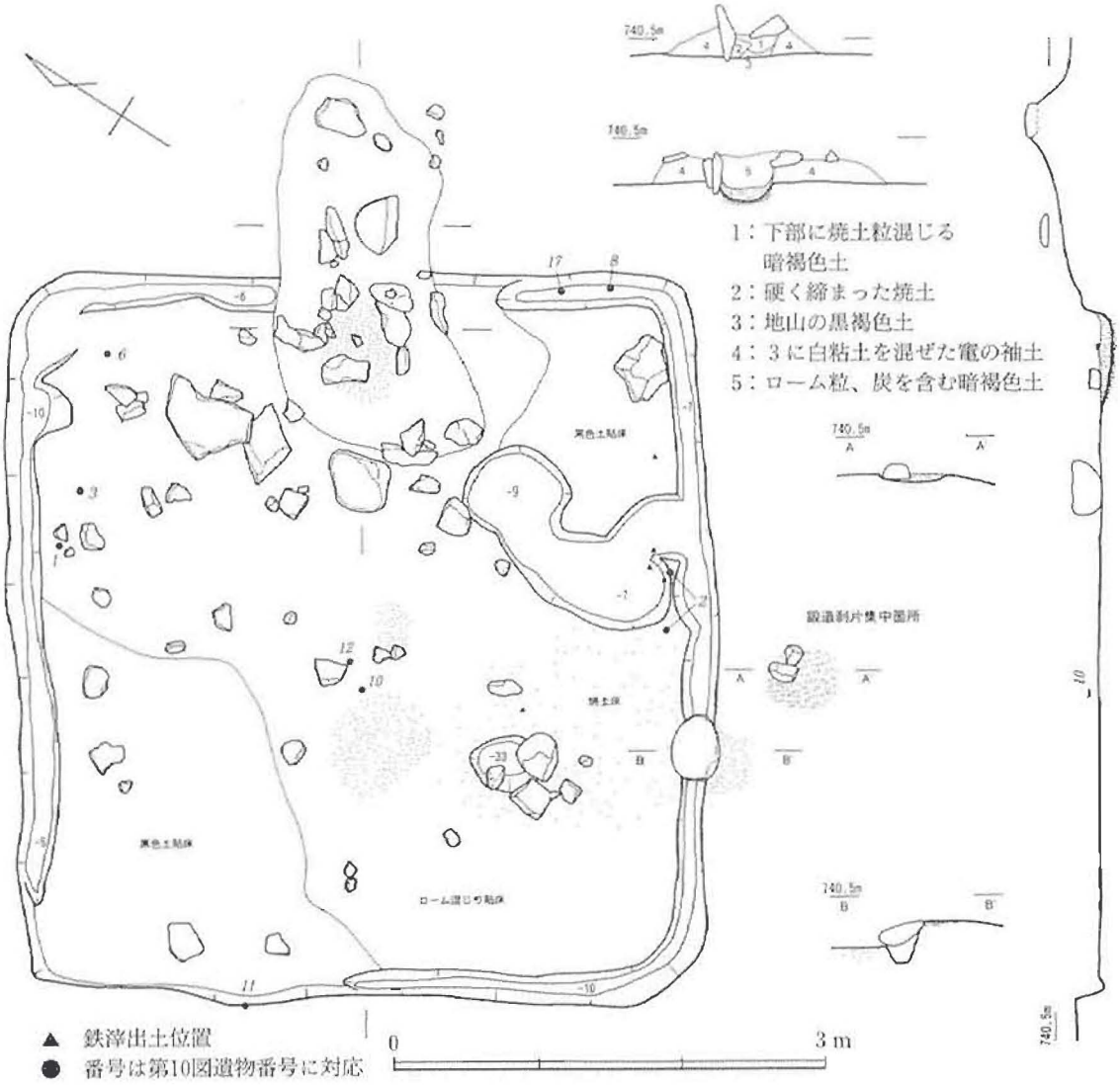
9号　小竪穴検出時より礫、炭がみられた。上面の礫は拳大のものが中心で136個を数える。いずれも良く焼けておりもろく、レベル差はあまりない。一方、下面の礫は人頭大の礫10個で構成され、組まれたようになっている。

遺物は全く出土していないが、石の組み方などから、縄文時代の集石と考えられる。

10号　氾濫で堆積した砂礫層上に、内面を見せた土器と小竪穴の輪郭が確認された。

堆土はローム粒、炭混じりの黒色土で、拳大の礫も若干混じっている。砂礫層に掘り込まれているため、底、壁には一面に礫が露出している。

土器は、小竪穴の上面に横だおしで平らに置かれていた。縄文時代晩期の無文の深鉢であり、形状などから10号小竪穴はこの時期の墓穴である可能性が高い。



第4図　1 号 住 居 址 (1/60)

住　居　址

1号住居址　本址は一辺約5mとやや大ぶりの方形の住居址で、北東壁中央に石組みの竈がある。床は全面的に貼床されているが、沢に堆積した黒色土に掘り込まれているため、西側の一隅を除けば、軟弱であまり締まっていない。壁際には一部を除き、ほぼ全周に周溝がめぐる。柱穴は一つのみ確認できた。

南東壁南隅寄りに安山岩の扁平な円礫があり、この周囲には焼土や鍋（けら）、鉄滓（てっし）（金（かな）クソ）、鍛造剝片（金肌（かなはだ））などが集中していた。安山岩礫が金床石（かなとこいし）だと推察され、小鍛冶遺構と判断された。しかし、鍛造剝片の集中している箇所は住居外であり、本址に伴うものかどうかは不明である。周辺を精査したが、柱穴など何らかの施設の存在を示す遺構は検出されなかった。

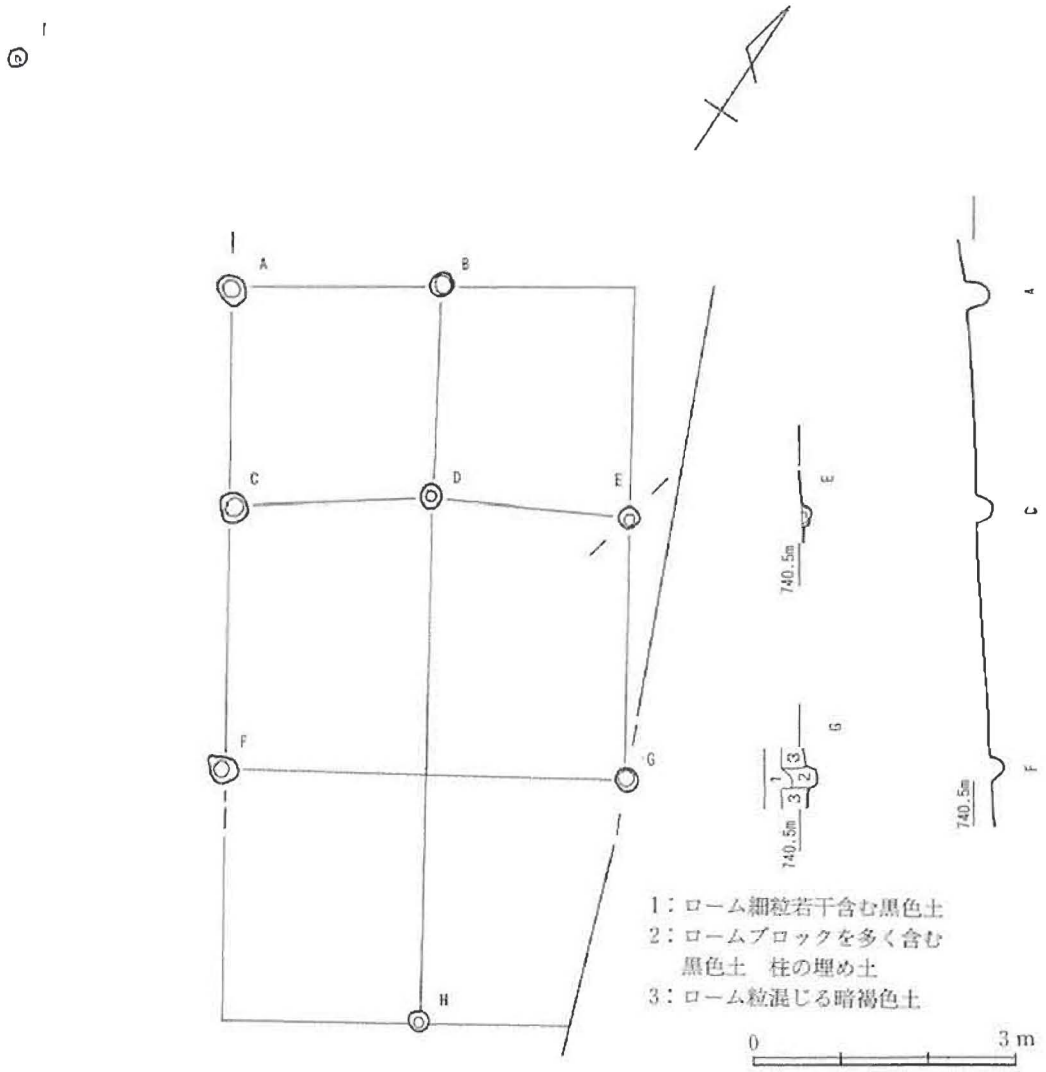
また、住居北西外の焼土から出土する遺物には、住居内出土遺物との接合関係がみられた。

第5図　1 号 建 物 址 (1/100)

掘立柱建物址

1号建物址　調査区南西側の道路寄りに柱穴群が検出された。検出面より上部から掘り込まれていたようで、浅いものが多い。この面まで掘り込まれなかった柱穴は失われている可能性もある。いずれも堆土は、ローム粒ないしロームブロック混じりの黒色土である。

柱穴群の様子からみて、複数の建物が重複しているようである。直線に並ぶものはいくつかあるが、調査区外にも広がるようであり、現状で建物のプランをはっきりつかむことができない。ここではこの柱穴群を総称して1号建物址とする。



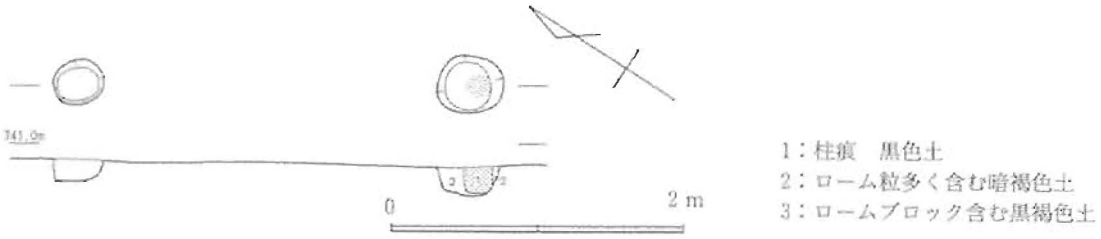
第6図　2 号 建 物 址 (1/100)

2号建物址　調査区北寄りに検出された柱穴群。1号建物址および後述する3号・4号建物址とは、調査区ほぼ中央の氾濫流路をはさんだ対岸にあたる。1号建物址と同様、上面では検出できなかったため、確認された柱穴は浅く、いくつかは失われている。堆土はロームブロック混じりの黒色土。柱痕の検出されたものと、発掘境界で断面が確認でき、上部から掘り込まれている様子がはっきりしたものがあり、これらをふまえて中世以降の建物址と判断された。

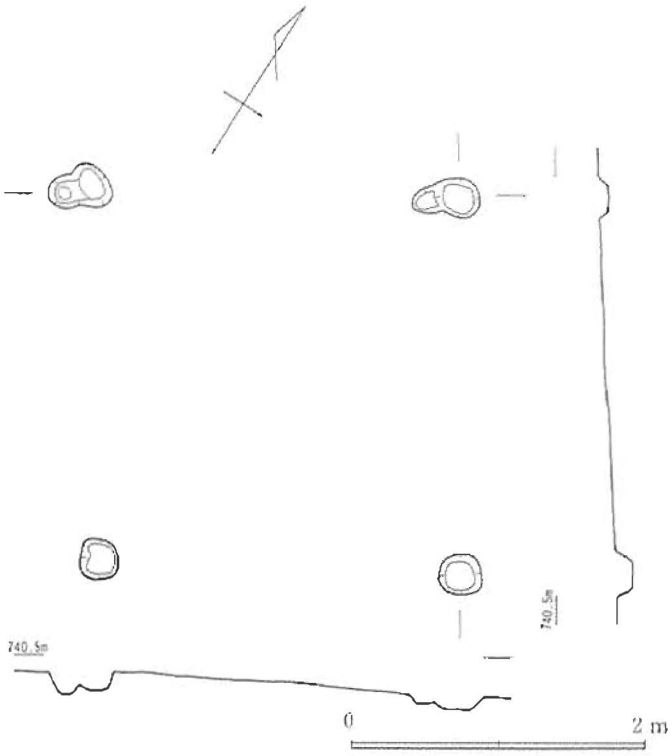
調査区で確認できたのは北西－南東軸の二間×三間の建物だが、調査区外へ広がっている可能性もある。

3号建物址　調査区西隅に柱穴が2基検出された。前述の建物址同様、いずれも浅い。うち1基には柱痕とロームブロック混じり黒色の埋土が確認できた。

建物の大部分は調査区外へ広がると思われる。また、本址は他の建物址と軸方位が異なる。



第7図　3 号 建 物 址 (1/60)



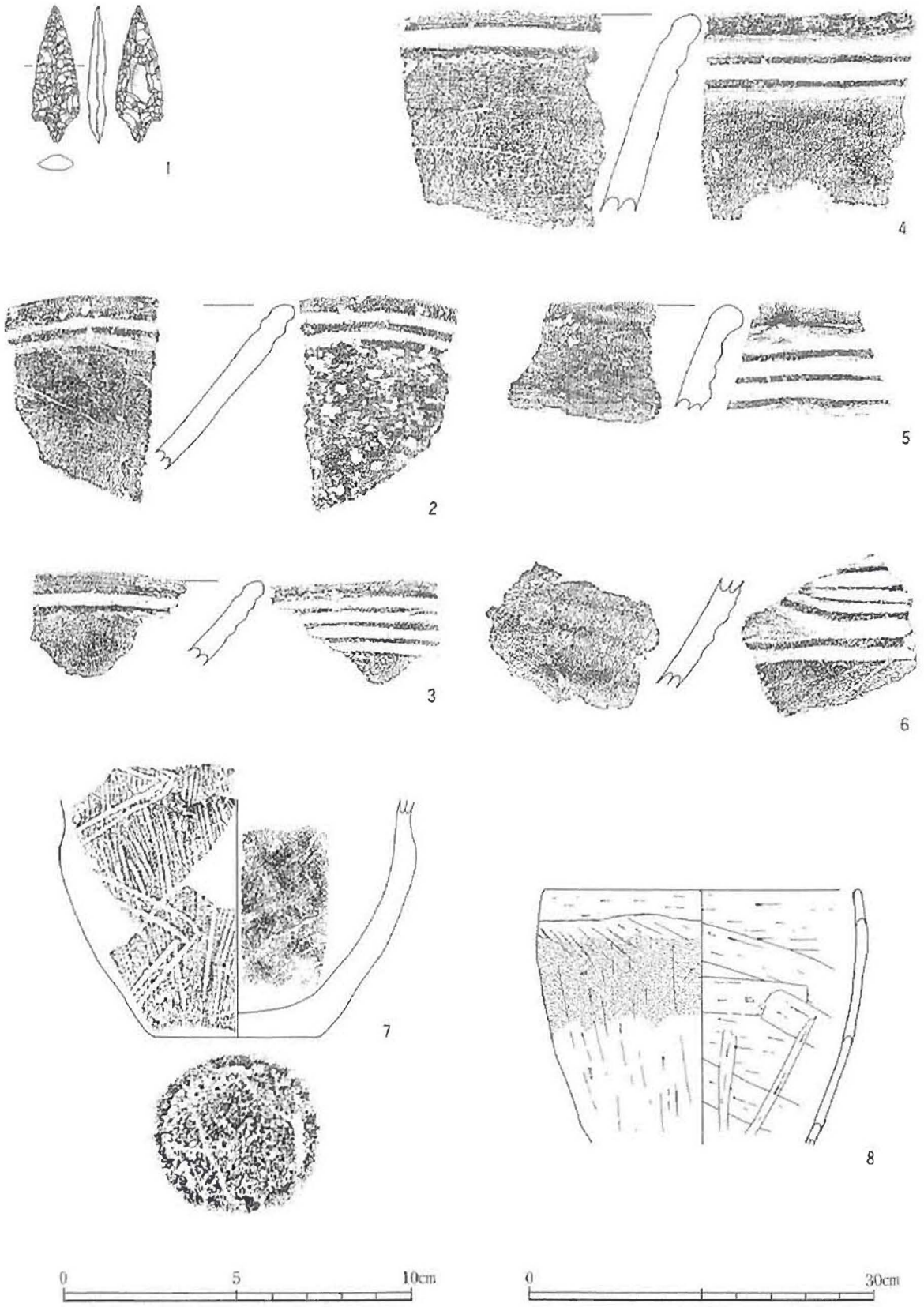
第8図　4 号 建 物 址 (1/60)

4 号建物址　　調査区西寄り、3号建物址の15mほど南に位置する。柱穴はいずれも浅い。南東へ流れる2条の汐状遺構の間に建てられた4本柱の建物である。

そ　の　他

調査区内には、氾濫による砂礫の堆積のほか、北西から南東方向へ汐状の流路が検出された。これを性格不詳の汐状遺構とし、調査を行った。調査区西寄りのものは列石を伴うなど人工的な要素もみとめられたが、全てが人工だと確定はできない。縄文時代中期、晩期、平安時代、中・近世と層により様々な時代の遺物を包含しており、調査区南東側では縄文時代晩期の遺物が比較的まとまって発掘されている。いずれも調査区外からの流入と考えられる。

また、調査区内では、いわゆるロームマウンドが複数確認されている。



第9図　縄文時代の遺物（1～7：1/2　8：1/6）

縄文時代の遺物

第９図１は有舌尖頭器で１号住居址出土。表面は丁寧な連続剥離が施されているが裏面は粗い。透明度の高い良質な黒曜石である。縄文時代草創期の遺物が平安住居に紛れ込んだものと考えたい。２～７は汐状遺構出土の晩期土器片である。２・３は浅鉢、４～６は深鉢片であろう。いずれも口縁近くに沈線帯をもつものである。７は小型の深鉢ないしは壷形土器で、底部に葉脈圧痕がみられる。胴部は櫛目状の工具によって縦方向に粗く施文され、その上から半裁竹管による２条一対の斜行する沈線が施される。８は10号小竪穴上面出土の深鉢である。土器の上部三分の二程であろうか、縦にほぼ半裁されている。内面、外面ともに篦状の工具で調整されており、とくに内面は削りといっていいほど強い。また、外面口縁より下４cmから８cmほどのところに、帯状に吹きこぼれのような炭化物が付着している（スクリーントーン部分）。

１号住居址の遺物

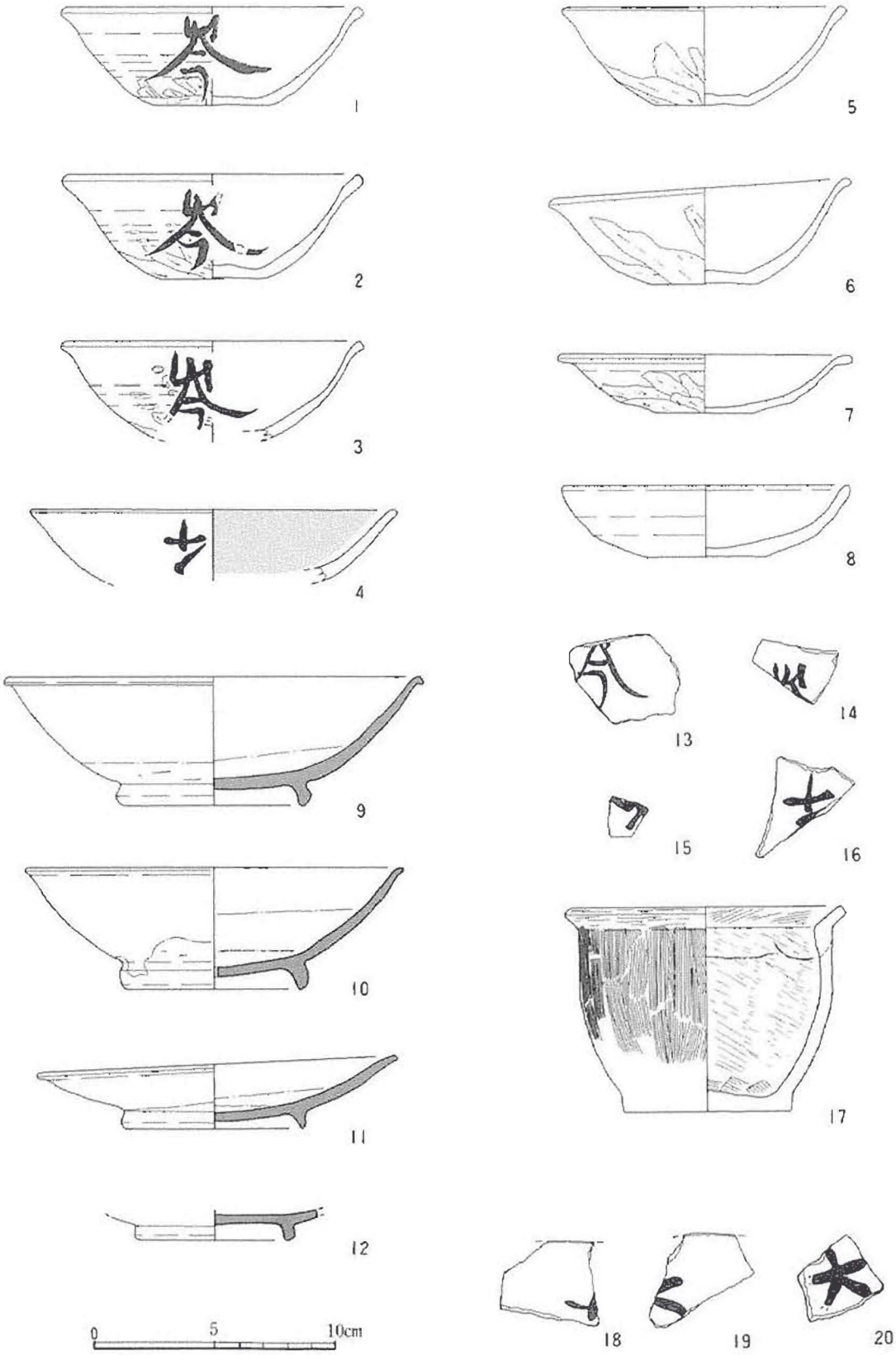
第10図１～８は土師器の埦と皿で、１～４には墨書がみられる。１～３と５～７はいわゆる甲斐型の埦と皿、４は内黒である。９～12は灰釉陶器の埦と皿で、12は底部見込みが非常に滑らかに磨られており、転用硯の可能性がある。13～16は墨書のある土師器片。16のみ内黒で、ほかは甲斐型の埦であろうか。17は小型の手づくね甕。胴部外面は刷毛目状調整で、底部には葉脈圧痕がみられる。なお、本址から出土した、通常の煮炊きに用いる長胴の甕は、いずれも小破片で復元ができないものばかりであった。また、このほかに約900ｇの鉧や鉄滓、掌一杯ほどの鍛造剥片が南東壁周辺から出土している。

土師器の埦や皿、灰釉陶器の特徴から、本址は10世紀前半から中頃に位置づけられよう。

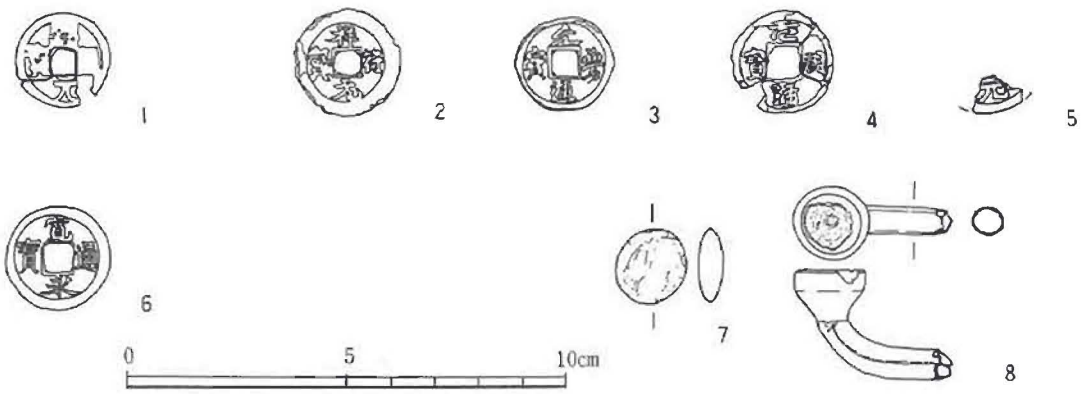
夏焼遺跡出土の墨書

本址出土の墨書ではっきり文字を判読できるものは、「岑」と「千」の二種である。「岑」は甲斐型土師器に、「千」は内黒土師器に書かれていることは興味深い。また器に対して文字を書く向きも上下全く逆である。「岑」は隣接する坂平遺跡からも数多く見つかっており、両者の関連が推察される。これが何を意味するものか、またその書体の比較など、今後注意して検討する必要がある。

また第10図18～20は遺構外出土の墨書片である。１号住居址の出土ではないが、掲載しておく。いずれも内黒の土師器片で、18は「十」のようにみえるが「千」の上部が消えてしまっているものかもしれない。19・20は「大」であろうか。



第10図　1号住居址の遺物 (1/3)



第11図　金属製品・他 (1/2)

金属製品・他

銭貨は6枚が出土した。第11図1は開元通宝で表面の摩耗著しく、かろうじて文字外形から開元通宝と判別された。2は祥符元宝、3は元豊通宝で、いずれも縁の剝落が進んでいるほかは比較的状態が良い。4は元祐通宝で風化著しく、非常に脆い。5は残存している「元」の書体から嘉祐元宝もしくは治平元宝だと考えられる。6は寛永通宝である。唐代の1と江戸時代の6を除き、いずれも北宋銭である。汐状遺構や流路の砂礫層中から発見されているものが多いが、2・3は1号建物址柱穴群中のロームマウンドから発見されており、1号建物址に伴う可能性もある。

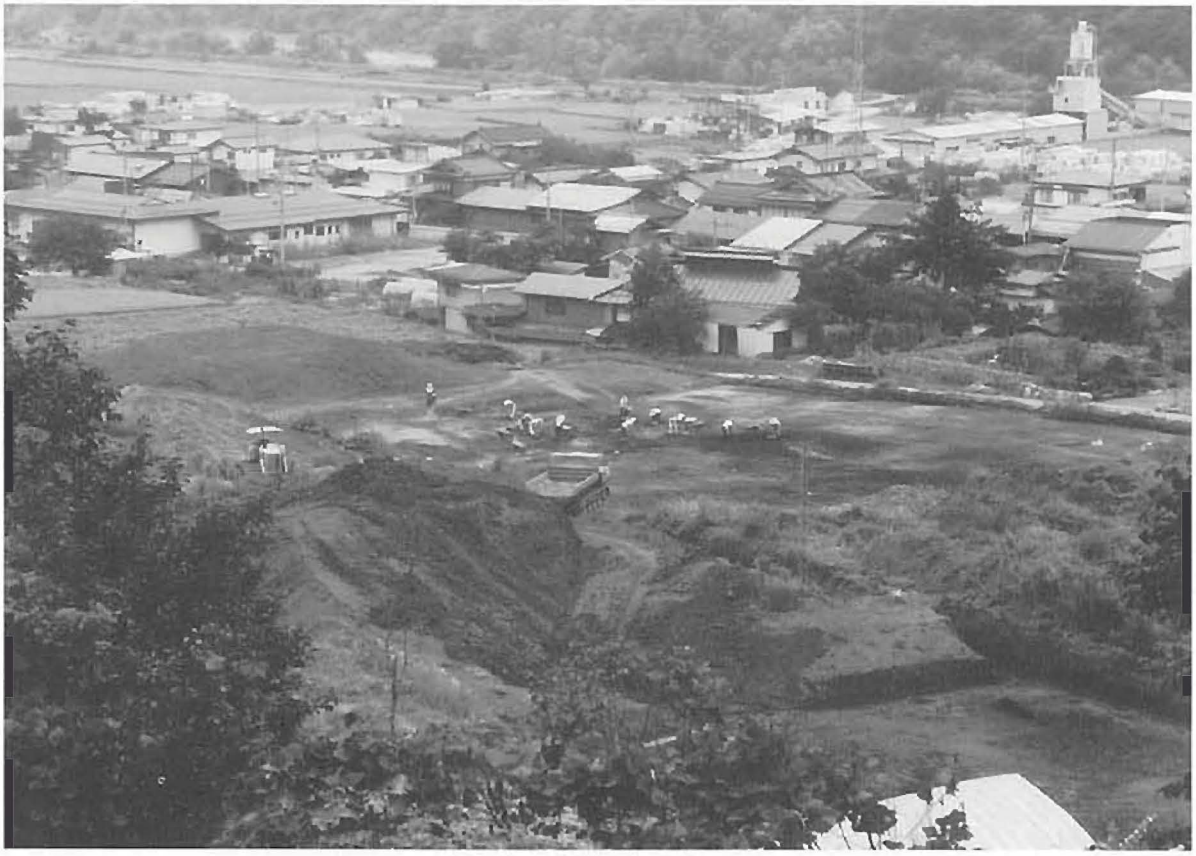
7は碁石状土製品で遺構外出土。8の煙管の雁首部は汐状遺構内の出土。青銅製で内部に炭化物が詰まっている。また図化していないが、1号住居址西の汐状遺構から刀子状の鉄製品が1点出土した（写真図版2）。

3　結　　語

今回の調査範囲は、かつて幾度となく河川の氾濫が繰り返されていた場所であった。西側で安定した地山面が認められたが、当初予想された複数の生活面や多くの遺構は検出されなかった。汐状遺構や氾濫によって堆積した砂礫層に内包される遺物の様子から、縄文時代から中・近世にかけての夏焼遺跡の中心は、調査区の北西に広がっていることが予想される。また、当初は予想されなかった縄文時代晩期の遺物がまとまって発見されていること、墓穴とおぼしき小竪穴の存在から、この時期の集落も存在するものと考えられる。

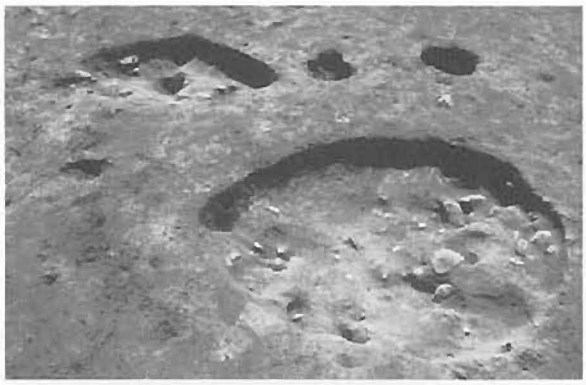
今回の発掘調査においては、地元蔦木区の東裏整備委員会、並びに地権者の方々にはひとかたならぬご協力をいただいた。文末ながら記して感謝の意を表したい。

調 査 区 近 景（東より）



調 査 区 近 景（北より）

写真図版２



上：２号、下：１号小竪穴（北より）

３ 号 小 竪 穴（北東より）

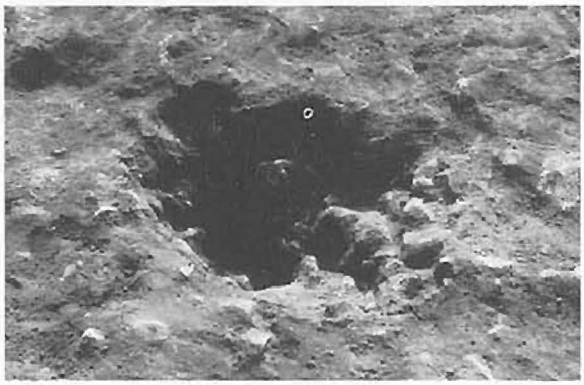
４ 号 小 竪 穴（東より）

手前左より奥右へ５・６・７・８号小竪穴

９ 号 小 竪 穴（北より）

10号小竪穴上面（東より）

汐状遺構内　刀子出土状況



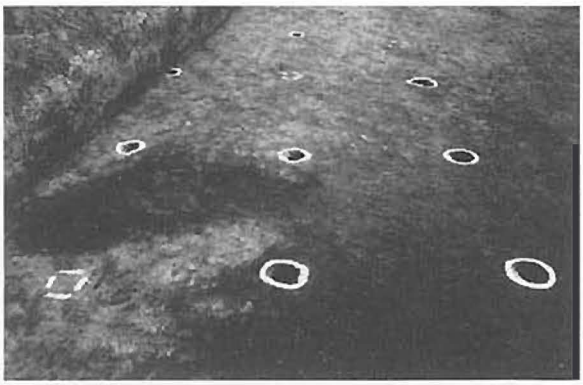
10号小竪穴完掘（北東より）

1号住居址　遺物・礫出土状況（南西より）

1 号 住 居 址　（手前が小鍛冶遺構）

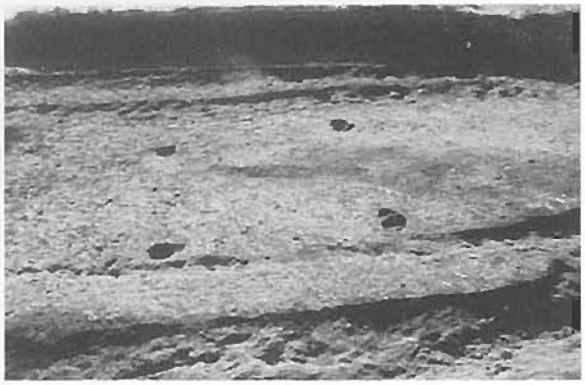
写真図版 4

1 号 建 物 址（北西より）



2 号 建 物 址（北西より）

3 号 建 物 址（北より）



4 号 建 物 址（北東より）

汐 状 遺 構（北西より）

報告書抄録

ふりがな	なつやけいせき
書　　名	夏焼遺跡
副書名	平成14年度県営中山間総合整備事業御柱の里東裏地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小松隆史
編集機関	富士見町教育委員会
所在地	〒399-0214　長野県諏訪郡富士見町10039-4　　Tel　0266-62-2400
発行年月日	西暦　2003年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
なつやけ 夏焼	ながのけん 長野県 ふじみまち 富士見町 おちあい 落合	203629	154	35度 52分 10秒	138度 16分 30秒	20020712 ～ 20021220	15,000	基盤整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
夏焼	集落	縄文時代 平安時代 中・近世	小竪穴 竪穴住居址　1軒 掘立柱建物址　4棟 汐状遺構	土器片 土師器・灰釉陶器 銭貨・陶器片	小鍛冶遺構

夏　焼　遺　跡

中山間総合整備事業御柱の里
東裏地区に伴う発掘調査報告書

2003年3月20日

発　行　　富士見町教育委員会

印　刷　　もえぎ企画書籍
岡谷市御倉町2－21
TEL　0266―22―4892